人間

第1話 再掲載

又吉　直樹

題字・画　村田　善子

1

理由はわからないが群衆がいっせいに絶叫していて、自分もその只中にいるのだけれど、どうしても周りの人の目が気になり叫ぶことができなかった。叫ばなければ命を落とす危険がある状況だということだけはなんとなく感じているのだが、それでも叫べないのが情けない。信念をもって叫ばないときめて、唇をむすんでいるならまだしも、はたから見れば叫んでいるように見えなくもない程度に口をひらき、誰にも届かないかすかな声を自分の耳にだけ響かせているのだからみっともない。精神的な高揚が足りていないので、隣の人が飛ばす唾さえも気になる。こんな風にして、自分は死んでいくのだろうか。

悲観しているのか笑っているのかはっきりしない表情で目を覚ました。寝覚めの悪さのわりに、布団は一切乱れていなかった。夢でよかったと安心しながらも、もう細部は忘れはじめていた。自分の誕生日に見る夢としては、妙に暗示めいていて、その平凡さにもあきれてしまう。便所にいきたいときに、そのまま便所にいく夢をみてしまうような単純さ

が、自分の苦しみを陳腐に解体し笑っているようだった。

生まれた瞬間を最後に、自分は心の底から叫んだことがないのかもしれない。誰でもそんなものだろうか。叫びと言わずとも、たとえば産声とおなじ純度で、なにか言葉を正直に発したことがあっただろうか。自分が生きてきた三十八年は嘘ばかりで、からっぽだったのかもしれない。

ベッドから起きて、ガスコンロに火をつける。電動のコーヒーミルで豆を砕く音を聴くと少し落ち着いた。一人暮らしが長いのでコーヒーを淹れるのにはなれた。手順になれただけで美味いわけではない。湯が沸くのを待つあいだにパソコンの電源を入れる。おなじ編集者から届いた複数のメールに挟まれて、懐かしい名前が一つあった。もう何年も連絡を取っていない友人からのメールだった。

美術の専門学校に通っていた頃、似たような環境にいた学生同士で集まり、ともに過ごした時期があった。充実していたわけではないが、濃密な時間ではあった。そんなどうしようもない時代にかかわった一人。顔も名前も覚えているのに、自分が彼をなんと呼んでいたかが思い出せず不安になる。彼は絵を辞めて就職したはずだった。自分は漫画家にはなれなかったが、絵は描いている。そもそも自分は漫画家になりたかったのだろうか。